

「No worries, very welcome Yukina! (なにも心配ないさ、大歓迎だよ雪菜!)」オーストラリアで出会った沢山の人が私に掛けてくれた言葉です。言葉も文化も宗教も違う彼らは私を心から歓迎し、日本では決して知ることの無かった大切なことに気付かせてくれました。埼玉親善大使としてオーストラリアで過ごしたこの5週間は私にとって人生の中で最も自分と異なる人々の尊重すべき素晴らしい所、そして人の温かさを心から感じることの出来た貴重な時間であり、自分自身と向き合うことの出来た時間でした。本レポートでは私の留学生活を通して学んだこと、体験したことを紹介します。

1. 埼玉親善大使として

『埼玉親善大使として来たからには何かに貢献したい。』

留学前もオーストラリア滞在中も、私の中にこの思いが強くありました。小学五年生の時に学校で盆栽を作ってから、日本文化としての盆栽の壮大な美しさと生きた芸術性の高さに魅力を感じたこと、また盆栽を学ぶために来日し、埼玉県の盆栽町で学ぶ外国人に出会ったことで、オーストラリアで日本の盆栽の素晴らしさを伝えたいと考えていました。さいたま観光国際協会様や盆栽町の多くの盆栽園の方々をはじめ、現地や県内で盆栽に携わる多くの方々のご助力で偶然にも私の滞在中にオーストラリア・ゴールドコーストで開催された **Bonsai Clubs International (UBC)** に出席することが出来ました。そこでスピーチをする機会を頂くことが出来ました。世界中から集まった大勢の盆栽愛好家の方々の前で私自身の盆栽との出会いや日本の伝統文化の盆栽の素晴らしさ、さらに2017年に埼玉県さいたま市で開催予定の世界盆栽大会について話しました。



ここはオーストラリア一目の前には世界中の人々、私は今、埼玉県代表として舞台に立っている—自分でも信じる事の出来ない夢のような機会でしたが緊張というよりはむしろ期待感と高揚感に満ち溢れていました。精一杯の笑顔で拙い英語でのスピーチを終えた時、鳴り止まない拍手の中、私は言葉にできない程の感動と感謝の気持ちで心がいっぱいになりました。日本の伝統文化である盆栽がこれほどまでに世界で認められていて世界中の人々を魅了していること、日本の文化が世界に誇るべきものであることを強く感じる事が出来ました。

また、日常生活においても日本文化を紹介し、実際に体験してもらう機会を作ることを意識しました。食の面では、ホームステイ先でお好み焼きや肉じゃが、抹茶ケーキといった日本食を振舞い、またホームステイ先に子供たちとお菓子で寿司を作ったりもしました。文化面では、浴衣を紹介したり、箸の使い方を教えたり、日本の伝統的な玩具と一緒に遊んだりしました。「日本に絶対行く！」満面の笑みで子供たちがそう私に言った時は本当に幸せな気持ちになりました。そして、真の国際人とは自国の文化を熟知した上で誇りをもって外国に紹介す



ることが出来、外国の文化を受け入れることが出来る人だと改めて感じました。

2. 学校生活 —多文化理解と英語学習—

留学生活の中心となったクイーンズランド大学附属英語学校ですが、ここは私の価値観を大きく変えた場所であり、「多くの文化が交わる場所で日本人である自分をどう表現し、主張しなければならないのかを考えたい」という私の留学の目的を実践する場でもありました。私のクラスには日本以外に中国、サウジアラビア、台湾、の学生がいましたが、第一に私が直面した問題は私自身が持つ「国のイメージ（先入観）」という障害です。中国については、毎日のように日本で報道されている日中の政治的問題や大気汚染、そして反日デモを目にしていたため、私の中に固定概念としての中国のイメージがありました。サウジアラビアについては、現在もイスラム法に基づく厳格な政治が行われていて、死刑執行数が世界最多だということを知っていたため、宗教、特にイスラム教に対して馴染みの薄い私にとって抑圧された国であるという漠然としたイメージがありました。最初の一週間は彼らと本音で話してみたい、彼らの国を知りたいという気持ちと彼らとの関わり方が分からず不安な気持ちが交錯していました。ある日のお昼時、皆でお互いの国について話す機会がありました。中国人のクラスメイトが私に言った「日本と中国、お互いの国の良いところは報道されないからね。本当は沢山あるはずなのに。僕は日本が好きだし来年絶対日本に行く。」という一言は私の中の何かを大きく変えました。それは私にとって凄く重く、価値のある言葉でした。サウジアラビア人のクラスメイトは、イスラム教について知りたいと言う私の頼みを快く受け入れてくれました。大学の講義等でイスラム教についての知識は少なからずあったものの、日本人の私にとってハラール（イスラム法に基づく食品の規定）が存在することや女性がヒジャブ（ムスリムの女性が顔を覆う布）を身に着けることは理解するのに難しい部分がありました。彼はハラールが頂いた身体を大切にするために清潔なものを食べるという考えの基に存在していること、ヒジャブは弱い立場の女性を守るためにあること、そしてムスリムは決して争いを望まないことなど、丁寧に私に教えてくれました。そして彼は「僕は僕だし君は君、みんな違う。色んな価値観があって違っているのは当たり前さ！」と言いました。彼らとの出会いを通して、先入観に囚われず自分の目で見て、実際に聞いて考えたこと、感じ



たままのことを大切にしたい。どんな国の人とも同じ人として、相手の素晴らしさを受け入れたい。そんな思いが強くなりました。 写真) クラスメイトとキャンパス前での一枚

授業はグループワークを中心としたディスカッション形式で常に自分の意見を言うことが求められました。絶対に正しいだろうと思われる答えを言っても必ず反論意見が出ます。時には頭で考えた自分の意見を言葉に出すことが出来ず自分自身に苛立つことや、何故理解してくれないのだろうかという思いから授業中は静かに先生の話の聞き、黙々とノートを取り質疑は授業後という日本の授業と比較してしまうこともありましたが、「自分の迎合性を打ち破りたい」という留学前からの目標を強く意識し、日頃からどんなに小さなことに対しても自分の意見を持つこと心掛けました。また、日本はハイコンテクスト文化の国であり会話や討論において、自身の経験等に基づいて相手の意図を察することでコミュニケーションをとります。しかし反対に他の多くのローコンテクスト文化の国々では言語そのものに高い価値と重要性を置いており、論理的思考、説明能力、表現力といったコミュニケーションに関する諸能力が求められます。



そのため、私は次第にただ主張するだけでは無く、文化も言葉も異なる相手に理解してもらうための意見の表現の工夫、相互理解としての共通知識を持つこと、そして討論の進行の仕方を考えることの重要性を非常に強く感じました。

英語学習においては、「五週間という短期間でどう効率よく英会話能力を向上させるか」ということが私の課題でした。私の通っていたクイーンズランド大学附属英語学校ですがその名の通り大学附属のため、キャンパスの中に位置していました。この恵まれた環境を何とかして生かしたいと思い、授業終了後に1日3人の大学の学生に話しかけるということを実践しました。これは私にとって、とても大きな挑戦でしたが、私が声を掛けた全員が快く協力してくれました。私は自己紹介や英語を勉強中であることを伝え、彼らに夢を聞きました。

小学校の先生になっていじめの悲惨さを伝えたい、政策を作りたい、日本で英語の先生になりたい—彼らが夢を語る姿は輝いていました。また、彼らの多くは大学入学前にギャップイヤー（1年程入学を遅らせてボランティア、職業体験などに当て社会的見聞を広めること）をとっていて、その時の話を沢山聞くことが出来たのですが、私には到底及ぶことの出来ない経験や考え方をっていて、彼ら自身が将来に真剣に向き合っていることに感心させられました。私が出会った学生の一人に、アメリカの大学と大学院の教育学部を卒業した後教師として4年働いたが、そこで生徒が精神面で多くの苦しみを抱えている事を知り、今、心理学を学んでいるという学生がいました。彼は自分の経歴や今後のことについて詳しく語り、そして私に「やりたいと思ったならすぐ実行に移しなさい。自分の人生なのだから！頑張るって！」と言いました。日本のように現役・浪人といった肩書に縛られない、誰にでも学問の扉が開かれ、学びたいことを好きなだけ学ぶという自由な環境を感じました。

留学を振り返って一番に感じる事は『感謝』です。道に迷って地図を片手に同じ道を行き来している私に、日本語で声を掛けてくれた日本に留学経験のある女性、バスを降りてからの行き方が分からない私に何分もバスを止めて丁寧に教えてくれる運転手さん、笑顔で「No worries!」と言ってくれる他の乗客の方々、バスが無くなってしまい途方に暮れていた私を安全な公式タクシー乗り場まで連れて行ってくれた夫婦—毎日毎日、私は沢山の困難に直面し、そんな私に手を差し伸べてくれる沢山の温かい人々に出会いました。日本では会釈で終わってしまうような日常の一コマでも、現地の人々は笑顔で目を合わせ「Thank you!」「Sorry!」と言葉にします。バスの中では運転手さんが突然歌いだし乗客の方々もうそれに合わせて歌いだした時もありました。私は留学を通して沢山の大切なことに気付かされました。日本で、いかに人に迷惑を掛けないかということに自然と意識して生活していた私にとってオーストラリアでの本当の意味での人と人の心の通い合いは本当に素晴らしく、新鮮でした。『留学』—それは私がずっと憧れていたことでした。留学をすれば毎日楽しい生活が送れて、英語もペラペラになって、自分自身を成長させることが出来る、という留学のイメージから憧れていた部分が大きかったと思います。実際は毎日が挑戦で、困難の連続でした。しかしそんな日々の生活の中で、日本では感じる事の無かったであろう本当に大切なことを心から感じる事が出来ました。最近では学生が留学する機会は増えているように思います。しかし留学を充実したものにする鍵はその人自身の行動に全てが掛かっていて、自分を表現し主張すること、そして日本の常識で物事を判断するのではなく、相手の素晴らしさを

尊重し見たまま感じたままに受け入れる事が大切だということに気付きました。私がオーストラリアで過ごした5週間は何にも代えがたい濃い時間であり、この留学を通して、外交や国際協力の第一線で働きたいという幼少の頃からの夢への思いが一層強くなりました。この貴重な経験を糧にこれからも沢山の挑戦をしていきたいと思っています。最後に私にこのような素晴らしい留学の機会を与えて下さった埼玉県国際課の皆様を始め、ご尽力頂いた皆様に心より感謝いたします。

森高 雪菜

